

積み重ねられた日々の中で考える

—— Sくんが十七歳になっただいま ——

津守 真

十七歳のSくんの父親が、額装した美しい刺繍を幾つも持ってきて見せてくれた。自分でデザインを考え、十数種の色糸を使った精巧な作品である。養護学校高等部から帰ると毎日一時間位ミシンの前に座り何日もかけて作るのだという。ミシンを使う仕事をしている父親にも、最初はどんな風になるのか見当がつかないが、そのうちに驚くようなものができている。布の四周には一定の幅で縫いしろの空間が残されている。行によってデザインが違うのに、糸の終わりが一定の位置に揃っているのは、はじめから糸の長さの見当をつけて切っているらしい。空間全体が把握されている。

私がSくん保育の場で出会ったのは、この子どもが七歳の時である。幼児期の一番大

変な時期を過ぎた後で、そのころ両親は私に次のようなことを話してくれた。

Sくんはごく小さいときから外に出るのが好きで、父親か母親がついて三時間も四時間も道路を歩き、家に帰るや座る間もなくまた外にゆきたいという。こんな日が何か月もつづく、こんどは家の中ばかりいて外出しない日が何か月もつづく。そういうときに親が何かしなければと思うと大変で、それでいいと思ってしまえるようになる。外出したときに卵を三十個も買ってきて、家に帰ると全部割ってしまう。しばらくたつうちに、テレビの料理の番組をその通りにやろうとしていることが分かってきた。この頃は段ボールを集めていて、それを修繕するのにガムテープを一日に何十本も使ってしまうのだという。

私がSくんを保育しはじめたのはこんな時だった。

\*

\*

### 最初の保育の一日

七歳のSくんは庭の真中に新しい絵の具のびんを五色並べ、ふたをあげたりしめたりしていた。私はそれに心をひかれて傍にいった。しばらく私は傍にいたが、水と筆を持ってゆけば絵をかくだろうと考えてコップに水をいれて傍においた。Sくんはすぐにコップを手にとり、水を口にふくんで私に吹きかけた。思いがけないことで私が逃げると追いかけてきて何度も水を吹きかけた。私もSくんに水を吹きかけ互いにふざけ合った。

私がバケツに水をいれて持ってくると、Sくんは絵の具のびんを全部バケツの水の中に漬けてしまった。そうしてびんのラベルをはがした。絵の具は筆につけて描くものとして考えていなかった私は、ラベルをはがすという発想に驚かされた。Sくんははがすことが好きだけでなく、はがしたラベルをきれいに並べて眺める。全部ラベルをはがすと彼はびんのふたをあけ両手にかかえて室内に持っていった。

それからSくんは黄色の絵の具を筆にたっぷりつけ、ポタポタしたたらせて奥の部屋との境の衝立まで持ってゆき、片隅を少し塗り、途中で止めて、衝立の真中に一本の垂直線を描いた。

幼稚部の保育室の片隅に観察室を改造した中二階がある。二畳位の小部屋で三段程の階段があり、子どもたちが喜ぶ空間である。Sくんはその壁に絵の具をしたたらせながら帯のように水平線をかいた。そこに電気の中継コードを見つけ、それを壁におさえつけ、「クギ」と言うので私はガムテープを持ってきた。Sくんはそれを手で裂いてコードを貼りつけられる長さに切り、中継コードを周囲の壁に張りめぐらした。彼の手によって空間が作りかえられた。

このSくんの保育の最初の日を見直すと、十年後のこの子どもの行為の仕方の原型が見られるように思う。これにつづく日々に、家庭でも学校でも保育者は新たな状況のもとに同じ問いの前に立たされ、その日々が積み重ねられて十年後が形成されている。最初の日

は後日と関連しているが、将来像が先にあって先立つ日々があるのではない。

### 途中で止める

絵の具で塗るとき途中で止めるのは何故なのか、最初の日の疑問は何年もつづいた。Sくんが五年生になったとき、数人の子どもと先生と机を囲んで刺繡をしているところに私は居合わせた。Sくんは手本の通りではなく自分で考えた線を刺していた。私はこの子どもが自分でデザインを考えていることに感心したが、それも完成させずに途中で止めていた。そのときはじめて私はこの子がそのつづきをどのようになしよるかと考えているのだろうと気付いた。途中で止めて他のことをしているうちに良い考えを思いつくことは、私共の生活にしばしばある。創造的な仕事に必要なステップである。衝立の色塗りを途中で止めたとき、外見はよくなくと、全部塗るようにと言わないでよかったと私は思った。

中学校に進学したとき、刺繡の時間に黒い糸を一本しか渡されなかったSくんは、先生の机の上から何色もの糸を取ってきた。彼は勝手なことをした罰として校庭を何周か走らされた。そういうときのSくんは素直で、弁解することもしない。先生の理解を得るには、母親が何度も話をしに学校にゆかねばならなかった。

いまでも一枚の刺繡を作るのにSくんは何日もかけてつづきをしている。

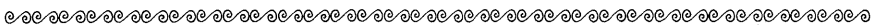
## 大きな物を動かす

Sくんの行為でもうひとつ顕著なことは自分の空間を思うように作りかえることである。彼はしばしば部屋の中の家具を移動させた。机、本箱、食器棚、ロッカー、壁掛時計など、学校の中でも大きな物をひきずって位置をかえた。そのときには大人は困らされることが多い。Sくんが家で自分の小さな部屋を持つようになったとき、何百と蒐集しているお菓子の箱や缶を何度も並べかえ、空間を作りかえた。

最初の保育の日に衝立や壁に垂直線や水平線を描いたのも、空間の配置を確かめていたのかもしれない。刺繍を刺して布の四周の縫いしろを残しておくのも、こうして大きな空間を作りかえる経験を積んでいることと関連があるだろう。

父親が刺繍を持ってきてくれたとき、幼いときは毎日外を歩いて大変だったけれど、無駄なこととは何ひとつなかったということがいまになって分かります、と述懐された。町を毎日歩いたから、付近の地理はわたしよりも詳しいと言って笑った。箱の蒐集に長年興味を持ってきたSくんは、いま日本の白地図を描いて各地の地酒の銘柄を書きこむことに熱中している。縫いしろの空間だけでなく、もっと大きな空間の感覚が彼の身体の中にはあるらしい。

この子どもの作品を見るとだれもが感心するのだが、より良い作品を作るためにこの子の生活があるのではない。いつもまだ形にならないものを沢山かかえて、それを楽しんでいく。先日私共の学校にきたときにも、Sくんは床一杯に新聞や広告をひろげて座りこ



み、地酒の小さな広告を見つけて切り抜いていた。

十年前の私との出会いの最初の頃は、私には戸惑うことの連続だった。いまは迷うことは減り、本人も周囲の人も自信を持って過ごしているが、未知な未来をかかえていることにおいてはかわらない。十年後の現在が過去において目標だったわけではない。過去と現在とは因果関係によっては結ばれない。人間の発達についての省察は、子どもにも大人にも、日々生活が進行する中でなされる。

(愛育養護学校)

